

## 福祉レクリエーションの歩みと課題

### Studies on the History of Social Welfare Recreation in Japan

田島 栄文

Yoshifumi Tajima

#### 〈摘要〉

国家資格介護福祉士が誕生して早30年を超えた。その養成カリキュラムの開始時にレクリエーションが組み込まれた。生活に困難を生じている人を介護するという行為の中にレクリエーションが位置づけられ、筆者はその重要性を受け止め、30年余福祉領域のレクリエーション支援力向上に力を注いできた。しかし、様々な理由で介護福祉現場での余暇・レクリエーション支援はまだまだ発展途上にある。福祉レクリエーションと呼ばれ発展してきたこの30年余を、日本のレクリエーション運動の歴史、福祉レクリエーション・ワーカー誕生、介護福祉士養成の中のレクリエーション教育と、草の根運動である「福祉レクリエーション・ネットワーク」づくりの4つの視点から振り返り、現状と今後の課題を考察した。

〈キーワード〉福祉レクリエーション 福祉レクリエーション・ワーカー  
介護福祉士 全国福祉レクリエーション・ネットワーク  
余暇支援の質の向上

#### はじめに

「レクリエーション」とは『広辞苑』によると「仕事や勉強などの疲れを、休養や娯楽によって精神的・肉体的に回復すること。また、そのために行う休養や娯楽」とされている。<sup>i</sup>

また、日本の中では、地域レクリエーション、学校レクリエーション、職場レクリエーション、福祉レクリエーション、野外レクリエーション、スポーツレクリエーション、レクリエーション活動、レクリエーション指導、…など様々な領域や場面で使われている。

その中でも昭和の終わりから社会福祉制度の充実とともによく目にするようになった福祉レクリエーションという言葉であるが、使われ出して30年を超えた。著者が仕事として介護福祉士養成校で「レクリエーション指導法」の授業を初めて担当したのは1990（平

成 2) 年であった。レクリエーションという、日本では学問体系の確立していない科目の教育と向き合って 32 年が経過した。

人口の高齢化と共に、福祉社会づくりが国の命題となり、高齢者や障がい者などの福祉サービス利用者を主な対象者とした「福祉レクリエーション」は、福祉サービスにおいて不可欠な援助技術の一つとして独自の存在感を發揮するようになった。その出現の歴史と現状について、4 つの視点からまとめ、そして課題と可能性について考察したい。

## I. 日本におけるレクリエーション運動と社会福祉領域におけるレクリエーション

### 1. 日本におけるレクリエーション運動

「レクリエーション運動」(以下レク運動と表記)という言葉を変義すれば、「余暇を活用して心身の健康を増進し、国民生活の発展と充実を目指す社会運動」と言える。この運動は 1930 年にアメリカで誕生し、1930 年代の世界的不況期を背景に先進諸国に急速に広がった。その特色は大衆の余暇を一つの教育資源と見なし、その可能性から個人と社会にとって有用な価値を引き出そうとするところにある。具体的な展開としてスポーツ振興や文化活動の奨励、余暇活用(=レクリエーション)のための諸条件の整備が目指された。<sup>ii</sup>

日本に「レク運動」が紹介されたのは、昭和の初め、1930 年代のことである。当時は「厚生運動」と翻訳されたこの運動は、娯楽や遊びのような「甲斐なきもの」に格別の意味づけを与えるという点で、一種奇異な印象を与えたものの、当時世界の台風の日であったドイツやイタリアにもこの運動が伝わって、大衆動員の面で大きな力をふるっているという事実が伝えられて、当時の内務省が積極的に取り上げた。軍国主義という時代相がレクリエーションを要求したのである。しかし、アジアの侵略主義があえなく消え去り、惨さんたる敗戦を喫した日本に入ってきたアメリカは、レクリエーションに特別の位置を与えた。たちまち「厚生」という用語はカタカナの「レクリエーション」に衣替えをし、レクリエーションは民主化路線を分かりやすく象徴するプログラムとして地域でも職場でも学校でも大いに歓迎される。

それから戦後 76 年もの歳月が経過し、日本社会はめまぐるしく変貌した。レクリエーションも戦後間もない頃の国民的人気を維持できたわけではなく、占領政策の終焉と共に活動が衰退し、もはや忘れられていくのかと思われた。ところが 1960 年代の高度成長に波長を合わせた「職場レクリエーション」を打ち出すと、若年労働者への労務管理政策として注目され、瞬く間に全国の職場に広がった。それも東の間、オイルショックによる労働環境の激変で急速に縮小するが、その後の低成長期には地域に展開して「コミュニティにおけるレクリエーション」を標榜して何とか命脈を保った。その後の人口の高齢化と共に福祉社会の建設が叫ばれると、高齢者や障がい者を主な対象者とした「福祉レクリエーション」に変身してリバイバルを果たし、今日では福祉サービスにおいて欠かせないアイ

テムの一つとして独自の存在感を発揮するまでに至っている<sup>iii</sup>。

## 2. 社会福祉領域でのレクリエーションの認知

日本における社会福祉領域での「レク運動」を振り返ると、1973年のオイルショックはレク運動にも影響を及ぼし、1970年代にレク運動の方向性は職場から地域へと移行していく。財団法人日本レクリエーション協会（以下日本レク協会と表記。現在は公益財団法人。）ではその一事業として高齢者や障がい者に対するレクリエーションが浮上してきた。「レクリエーション運動と福祉は同じ底流をもつ。国民の相互理解のもとで高齢者や障がい者の生活不安の現状を考え、福祉としてのレクリエーションの役割に注目したい」と当時の『レクリエーション白書'74』第1章では述べている<sup>iv</sup>。

そのため、日本レク協会は、1974年に「高齢者レクリエーション・ワーカー」の養成事業を始めた。それまで日本レク協会は1949年から指導者、1962年から上級指導者という資格制度を作っていたが、日本のレクリエーションリーダーの「お家芸」である集団ゲームや歌やダンスなどの集会型レクリエーション中心であった。それらの活動内容を高齢者向きに選び直したりアレンジを加えればその方法は高齢者に対して通用することがわかってきた。地域の高齢者福祉施設などで集団生活をしている高齢者へのレクリエーションが求められはじめたのである。

このセミナーは1974年から1988年までの15年間に、毎月1回程度、合計180回ほど全国を巡回して開催され、その参加者は1万人を突破した。その半数以上は高齢者福祉施設職員で、このセミナーがこれらの施設のレクリエーションへの理解と実践を促進したと思われる。

さらに、セミナー修了者からの要望を受け、1983年度から「高齢者のためのスポーツセミナー」が8回開催され、さらに研究志向の高まりを受け「高齢者のためのレクリエーション研究セミナー」が同年度から3回、そして「保健婦（現保健師）のためのレクリエーション講習会」も同年度から1989年度にかけて9回実施している。

日本レク協会はこのような人材養成事業の他にも並行して調査研究事業に取り組んでいる。こうした調査研究は日本レク協会のレクリエーション指導論を成熟させる糧ともなった。一方、1981年にG.S.オモロウ著「セラピューティック・レクリエーション入門」（今井毅訳、不味堂）が刊行された。この文献が日本レク協会担当スタッフに大きな影響を与える。それはアメリカの「セラピューティック・レクリエーション・サービス」の基本的理論モデルの理解を促進できたことにあり、協会はそれをいち早く高齢者レク・ワーカー養成セミナーのテキストに取り入れることとなった<sup>v</sup>。このような取り組みが、現在日本レク協会が養成している「福祉レクリエーション・ワーカー」の先駆けとなったといえる。

そして、1989年の全国レクリエーション研究大会（日本レク協会主催）で「福祉レクリエーション」の部会が設けられた。「福祉レクリエーション」という言葉はこの時点で日本レク協会が公式に採用したものとみてよい<sup>vi</sup>。

## II. 「福祉レクリエーション・ワーカー」の誕生

### 1. 日本レクリエーション協会公認指導者資格「福祉レクリエーション・ワーカー」

次に、本学健康福祉学科で日本レク協会公認指導者養成課程認定校（以下レク課程認定校と表記）として「レクリエーション・インストラクター（以下レク・インストラクターと表記）」に続いて2021年度入学生から取得できるようになった「福祉レクリエーション・ワーカー（以下福祉レク・ワーカーと表記）」について述べる。

日本レク協会は1992年度より「福祉レク・ワーカー研究開発プロジェクトチーム」を編成し、資格制度の構想や養成カリキュラムの検討が開始され、1993年4月に「人材養成マスタープラン」と「公認指導者資格認定規定」を正式に施行し、1994年度より「福祉レク・ワーカー」を日本レク協会認定資格として位置づけ、スタートした。

その「人材養成マスタープラン」では、福祉レク・ワーカーの役割を次のように述べている。

「福祉レク・ワーカーは社会福祉や医療・保健分野での『レクリエーション援助の専門職』として活躍する。デイサービス施設や保健所でのリハビリテーション事業など、社会福祉や医療・保健分野ではレクリエーションの比重が高まっており、専門職としての活動が期待される。また、各種の社会福祉や医療・保健関係専門職のサブ資格としても期待される」。

また、2019（平成31）年度に日本レク協会が作成した通信教育案内書を見ると、「利用者の心の元気を支える専門職 福祉レク・ワーカー」と謳っている。そして以下の4点が出来るようになる資格と明記している。

- ① 一人ひとりにあう、楽しく、快く、彩りあふれるレクリエーション計画の作成
- ② レクリエーション計画にもとづいた個人へのレクリエーション支援の実施
- ③ 個人の支援目標を実現させる集団レクリエーション支援の計画と実施
- ④ 一人ひとりにあう、レクリエーション活動のアレンジ

そして、活かせる職種として、介護職・生活相談員・ケアマネ・理学療法士・作業療法士、サービス提供責任者・施設長、ボランティア（介護予防）、を挙げている<sup>vii</sup>。

### 2. 福祉レクリエーション・ワーカー養成カリキュラム

1994年より合計200時間の学習カリキュラムでスタートした。受講資格として、「レク・インストラクター」「スポーツ・レクリエーション指導者」「レク・コーディネーター」資格を有している人、資格取得の要件は、資格申請時に満20才以上であることとなっている。通信教育と養成課程が認可された大学等高等教育機関で学べる。最短で1年程度で資格取得が可能である、としている。

### 現行の養成カリキュラム

|     |   |                |
|-----|---|----------------|
| 科目1 | レクリエーション支援のための基礎的な理解<br>インストラクターの理論科目と実技科目  | 51 時間          |
| 科目2 | レクリエーション支援のための福祉領域の基礎知識<br>支援対象者の生活の理解<br>社会と福祉サービスの理解                            | 35 時間          |
| 科目3 | 福祉レクリエーション支援の専門知識・支援技術<br>福祉レクリエーション支援の理解<br>福祉レクリエーション支援の計画<br>福祉レクリエーション支援の介入技術 | 84 時間 (3・4 合計) |
| 科目4 | 福祉レクリエーション支援の総合演習   |                |
| 科目5 | 福祉レクリエーション支援実習  | 30 時間          |

このように、地域レク協会やレク課程認定校で一番多く養成されている「レク・インストラクター」の学習時間（上記科目1の51時間＋現場実習9時間）と比べ、約3.3倍の学習時間と筆記・実技試験をクリアして取得する、専門的な資格という位置づけである。

### 3. 登録者の推移とその他の民間資格

表1は福祉レク・ワーカー登録者数の年次推移である<sup>viii</sup>（人数は各年度末3月31日現在のもの）。

これをみると、2000年の介護保険導入あたりから登録者が伸び、2005年の10,224人をピークに福祉レク・ワーカー登録者が減少している。通信教育と同時に日本レク協会公認指導者養成課程認定校（以下レク課程認定校と表記）制度で取得できるこの資格は学校数の伸びとともに増えていった。

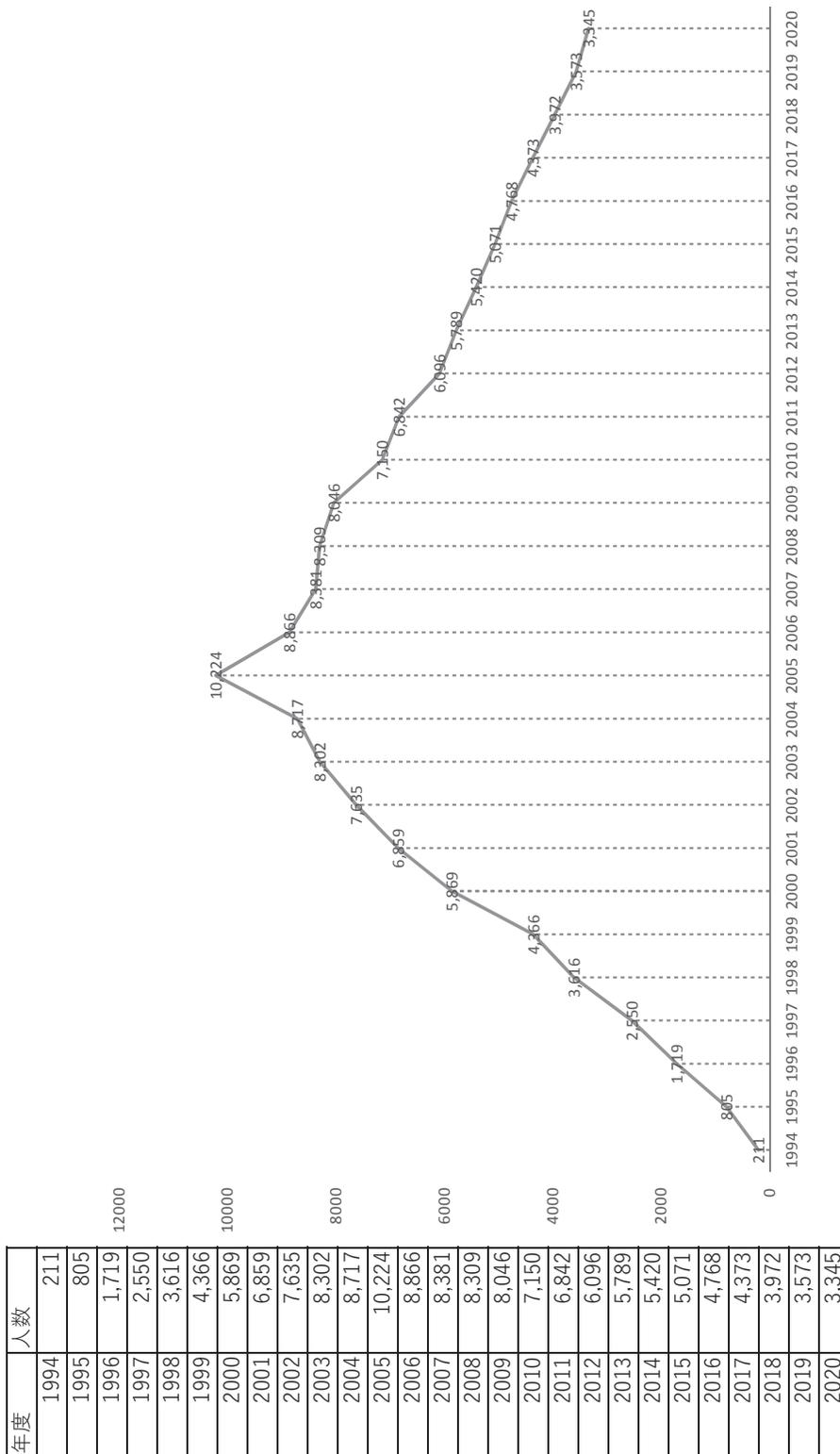
1997年度のレク課程認定校講座数は227講座、2004年度は396講座、2011年度は375講座あったが、2020年度は261講座まで減少している。その中で福祉レク・ワーカー養成校講座数だが、1997年度は27講座、2011年度は33講座あったが、2012年度30講座、2020年度は13講座まで減少している。（日本レク協会事業報告より）

もう一つ、日本介護福祉士養成施設協会（以下介養協と表記）の介護福祉士養成校減少と、その中のレク課程認定校減少が影響していると言える。次章で検証したい。

また、その他福祉レクリエーション関連の民間資格として、2つの団体がある。

一つは、2001年設立のNPO法人アクティビティ・サービス協議会である。アクティビティ・サービスは、福祉サービスを受ける方々の心身及び生活の活性化を支援するという事から、そのためのすべてのサービスを考え提供すること。当協議会ではこのようなサービスが提供できる人材の育成と、サービス提供のための研究を行っている。

表1 福祉レクリエーション・ワーカー登録者数



指定カリキュラムとしては、アクティビティ・サービス論、アクティビティ・サービス支援論、アクティビティ・サービス支援技術論①環境整備に関すること②週末ケアに関すること③計画論と演習で、最低学習時間は60時間としている。2021年3月現在、養成課程認定校10校から133名の「アクティビティワーカー」資格登録者が誕生、養成校資格登録者総数累計は6997名とのことである<sup>ix</sup>。(HPより)

二つ目は、2014年設立の一般社団法人日本アクティブコミュニティ協会である。この法人は、高齢者の「生きる喜び」「楽しみ」を見い出す活動である高齢者介護レクリエーションについての情報収集や技術などの調査・研究を行い、それらを活用した高齢者介護支援、レクリエーション介護士の人材育成と認定を通じて、心豊かな高齢社会の環境構築に寄与することを目的としている。

講座内容としては、介護レクの実践（アイスブレイクの技術）、介護レクの意義と役割、高齢者の状態別コミュニケーション、介護レクの企画の方法、ワークショップ（グループで企画書作成）、介護レクの実践（実践中の声かけの方法）、グループで企画の発表、講師による講評、介護レクの計画とアレンジの方法、2級認定試験、とある。2日間・12時間が学習時間の目安としている。2020年8月現在、「レクリエーション介護士2級」が30,000人を突破したとのこと。レクリエーション介護士1級もある<sup>x</sup>。(HPより)

とくに後者の「レクリエーション介護士2級」資格は、新聞折込み広告のユーキャン講座にも入っており、認知度も上がっている。筆者もレク協会の学習会や福祉関係者のレク研修講師に招かれたときにこの資格とレク協会の資格について尋ねられることも多い。このように福祉レクリエーションの必要性が高まってきたため、民間資格が増えてきたと言えるであろう。視聴覚コンテンツも開発が進んでおり、日本レク協会は「レクぽ」を、レク介護士は「介護レク広場」というサイトを開設し、従来書籍や雑誌等の紙レベルでしか得られなかったレクネタ（レク情報）が気軽に手に入るようになっている。

とはいえ、どれも民間資格で知名度が低いこと、取得費用が安くはないこと、給料・手当に反映する資格とはまだ言いがたいといった弱点もある。

### Ⅲ. 国家資格「介護福祉士」とレクリエーション学習

#### 1. 「介護福祉士」必修科目の一つに「レクリエーション指導法」

1987年5月に介護サービス従事者の資質の向上と養成確保を目的とした「社会福祉士及び介護福祉士法」が制定・公布され「介護福祉士」国家資格が誕生し、翌1998年4月には、全国で24校25学科の介護福祉士養成校がスタートした<sup>xi</sup>。

その養成カリキュラム14科目（表2）の中に「レクリエーション指導法」が組込まれた。これは社会福祉領域におけるレクリエーションの普及振興を図ってきたレクリエーション関係者にとって、たいへん大きな前進であった。当時、同法の企画立案に関わっていた厚

生省老人福祉専門官は「レクリエーションは、本来の意味に付け加えて障害者などに対する治療的レクリエーションも取り組んでほしい。また、高齢者福祉の中では、彼らの社会的存在感の充足という点からもレクリエーションは不可欠である」と述べている<sup>xii</sup>。

レクリエーションの定義的考え方として現在も使われている「レクリエーション＝生活の快」論は、この時期に垣内によって「レクリエーションとは、生活を楽しく、明るく、快くするための一切の行為である。行為とは単に四肢のみの行為ではなく、視覚、聴覚、臭覚、触覚などに関する一切の行為を含む」と示されていた。

日本レク協会発行の50周年記念誌では、「この法律の制定によって、社会福祉領域におけるレクリエーションは、国家資格者である『介護福祉士』が当然身につけておかなければならない知識・技術として、確固たる地位を得ることができたのであった」と述べている<sup>xiii</sup>。

生活に困難を生じている人を介護するという行為の中に「レクリエーション」が位置づけられたということは、すべての人の基本的人権としてのレクリエーションが認められたと考えている。

表2 介護福祉士資格制度発足当初のカリキュラムと国家試験問題数

| 科目名         | 問題数 | 科目名       | 問題数 |
|-------------|-----|-----------|-----|
| 社会福祉概論      | 8   | 家政学概論     | 4   |
| 老人福祉論       | 8   | 栄養・調理     | 4   |
| 障害者福祉論      | 4   | 医学一般      | 8   |
| リハビリテーション論  | 4   | 精神衛生      | 4   |
| 社会福祉援助技術    | 8   | 介護概論      | 8   |
| レクリエーション指導法 | 4   | 介護技術      | 14  |
| 老人・障害者の心理   | 8   | 障害形態別介護技術 | 14  |
|             |     | 計         | 100 |

初の第1回国家試験が1989（平成元）年1月に実施された。著者が介護福祉士養成校で「レクリエーション指導法」の授業を初めて担当したのは1990年であった。レクリエーションという、日本では学問体系の確立していない科目の教育と向き合って32年が経過した。

人口の高齢化と共に、福祉社会づくりが国の命題となり、高齢者や障がい者等の福祉サービス利用者を主な対象者とした「福祉レクリエーション」は、福祉サービスにおいて不可欠な援助技術の一つとして独自の存在感を発揮するようになった。これは1970年代から日本レク協会を中心に進められてきたレク運動の成果であると考えられる。1995年に新たに誕生した民間資格「福祉レクリエーション・ワーカー」もその成果と言えよう。

そして、2000（平成12）年4月、介護保険制度の本格施行を迎えた。折しも介護福祉士の養成教育が始まって10年余りが経過しており、厚生労働省は社会福祉基礎構造改革を進める中で、介護サービスの質を向上させる施策の一環として、同じく2000（平成12）年4月に教育課程を改正した。初の改正である。従来1500時間だった養成教育の総時間数を1650時間にし、150時間増加した。

その際科目名や国家試験問題数も表3のように改正され、全体で100問から120問となり、「レクリエーション指導法」は「レクリエーション活動援助法」と科目名を変更され、利用者本位の視点が強調され、問題数も4題から事例問題を含む6題になった。

表3 2000年4月改正のカリキュラムと国家試験問題数<sup>xv</sup>

| 科目名           | 問題数 | 科目名     | 問題数 |
|---------------|-----|---------|-----|
| 社会福祉概論        | 8   | 家政学概論   | 8   |
| 老人福祉論         | 10  | 医学一般    | 12  |
| 障害者福祉論        | 4   | 精神保健    | 4   |
| リハビリテーション論    | 4   | 介護概論    | 8   |
| 社会福祉援助技術      | 8   | 介護技術    | 20  |
| レクリエーション活動援助法 | 6   | 形態別介護技術 | 20  |
| 老人・障害者の心理     | 8   | 計       | 120 |

\*ゴシック体…科目名変更（家政学概論は栄養・調理と統合）

介護福祉士養成校が年々増加したのもこの時期である。日本レク協会公認「レク・インストラクター」資格取得者が右肩上がりが増え、その大半が介護福祉士養成校出身者であったのもこの時期である。1994年に日本レク協会公認「福祉レクリエーション・ワーカー資格制度」が誕生したのも、この流れを後押ししたと言えよう。

ホームヘルパー2級・3級養成カリキュラムにも「レクリエーション体験学習」が組み込まれた。

## 2. 介護福祉士養成校・レクリエーション指導者養成課程認定校の減少

国家資格介護福祉士養成校は1988年に24校でスタートしたが、1991年には115校、1996年には214校、2001年には322校、2005年には402校と増加の一途をたどり、2008年の434校がピークであった<sup>xvi</sup>。入学定員も2006年の27,105人をピークに減少傾向を続けている。2016年は377校・16,704人<sup>xvii</sup>、2020年は336校・13,619人である<sup>xviii</sup>。

2007（平成19）年12月に「社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律」が公布された。また、法改正に伴って2008（平成20）年4月には、厚生労働省から「社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」が示され、翌

2009(平成21)年4月から新しい教育カリキュラムに則った介護福祉士の養成が始まった。

看護教育などを参考として、介護現場により密着した新カリキュラムが作成され、旧カリキュラムを抜本的に改善することになった。そこでは先にみた従来の教育学的な検討の仕方を払拭して、実習関連時間をやや拡張し、介護現場にふさわしい体系化がされ領域(①人間と社会、②こころとからだのしくみ、③介護)が設けられた。また、2年課程の履修時間総合計も1,650時間から150時間拡張され1,800時間となった<sup>xix</sup>。その後領域④医療的ケアも追加され、改正を重ね、現在は1850時間の学習時間となっている。(表4)

表4 2009年4月改正・その後追加の現行カリキュラムと国家試験問題数<sup>xx</sup>

| 科目名            | 問題数 | 科目名         | 問題数 |
|----------------|-----|-------------|-----|
| 人間の尊厳と自立       | 2   | 発達と老化の理解    | 8   |
| 人間関係とコミュニケーション | 2   | 認知症の理解      | 10  |
| 社会の理解          | 12  | 障害の理解       | 10  |
| 介護の基本          | 10  | こころとからだのしくみ | 12  |
| コミュニケーション技術    | 8   | 医療的ケア       | 5   |
| 生活支援技術         | 26  | (総合問題)      | 12  |
| 介護過程           | 8   | 計           | 125 |

\*問題数は第34回国家試験の問題数を表記、(総合問題は国家試験のみで科目ではない)

これまでの介護福祉士養成指定科目名が大きく変更され、「レクリエーション活動援助法」の科目名も消えた(領域「介護」のテキストの一部に表記されているが)。レクリエーション科目を入れるかは、各養成校の裁量に委ねられた。独自科目として残した養成校もあるが、必修でなくなったことでレクリエーションの学習を外した学校もあった。

それを、レク課程認定校/介護福祉士養成校の割合で比較してみると、筆者が長年勤務してきた近畿地区の2005年度介護福祉士養成校数は、66校の内39校がレク課程認定校であった(59.1%)が、2012年度は51校の内24校(47.1%)となり、今年2021年度は49校の内14校(28.6%)に減少している。新カリキュラムでレクリエーションが必修科目から外れたことで明らかに減少している。

#### IV. 全国福祉レクリエーション・ネットワーク

4つ目の視点として、ネットワークづくりの運動からみる。ネットワークを作るにも、日本レク協会のようなナショナルセンターからのトップダウンの指示ではなく、地域における草の根運動的な実践者や活動団体のリーダーシップが必要となる。1980年代には「東京障害者とレクリエーション研究会」と「新潟ハンディキャップ・レクリエーション

ン研究会」と「福岡市レクリエーション協会福祉レクリエーション部会」の3団体が国内では福祉領域のレクリエーション実践に熱心でよく情報を発信していた。

ネットワーク構想はこの3団体が中心となり開催した、全国福祉レクリエーション研究交流集会(第1回は福岡市・1987年2月)から生まれた。同年12月の第2回集会(新潟市)、1989年1月の第3回集会(東京都)を経て、1989(平成元)年に福岡県で開催された第1回全国レクリエーション研究大会(42年続いてきた全国レクリエーション大会を名称変更)でようやく旗揚げに向けて動き出した。

この大会で、部会の一つに「福祉レクリエーション」が設けられた。「福祉レクリエーション」という言葉を日本レク協会が公式に採用したのがこの時であったとされる。8月下旬の3日間、福祉レクリエーション部会には425名の参加者が集い、テーマの「生きがい福祉とレクリエーション」について研究協議がなされた。その初日の夜に全国福祉レクリエーション・ネットワーク(以下全国福祉レクネットと表記)の旗揚げに向けての準備会が持たれ、翌年の1990年4月に正式に発足し、活動を開始することになったのである<sup>xxi</sup>。

組織のカタチを整えるよりも、活動の内容を充実し、実績を積み上げていく方がよいという全体の意見から、あえて会長・副会長等の役員を置かずスタートした全国福祉レクネットの発足当初の概要と現状を以下に簡潔にまとめた。

目的をみると、「全国福祉レク・ネットワークは、福祉レク運動をすすめるグループ及び個人が、お互いの活動を支援するために連絡をとりあい、協力をしあいながら個人の活動からグループの活動へと広げていくことを願いとして、福祉レク運動を推進していくことを目的としたネットワークである」と記されており、当時タテの組織が主だった社会的活動団体の中で、ヨコのつながりを無限大に拡大していこうとするネットワークという新しい形の組織に期待していたことがうかがえる。

役員は前述の通り置かず、ネットワークの運営と事業の推進に携わる者として運営委員を置き、3年目から運営委員の中から代表と副代表を置くようになり、運営委員会で運営するようになった。現在は、各地域ブロックの運営委員から代表者(常任委員)を出し、そのメンバーが常任委員会を開き会員の声を集めながら運営している。

事業としては、①年4回のニュースの発行、②年1回の研究レポートの発行、③年1回の総会の開催、④全国大会や地域の福祉レク講習会の企画・運営への協力、⑤その他依頼に応じて福祉レク推進につながる事業などを挙げていたが、現在も、この路線を踏襲しながら、全国での福祉レク運動の啓発・推進につながる事業を展開している。

事務局は日本レク協会内に置き、事務局員は運営委員の中から選任するとしていたが、現在は全国障害者総合福祉センター(戸山サンライズ)に置き、筆者が今年度から事務局長を務めている<sup>xxii</sup>。全国福祉レクネットは2021年度で発足32年目を迎えた。

次に、会員数及び会費等の変動をまとめる。(表5)

表5 全国福祉レクリエーション・ネットワークの動向

|         |   |
|---------|---|
| 1990年度  | 個人会員 119名、団体会員 13団体<br>(個人会費 1000円、団体会費 4000円からスタート)                |
| 1996年度～ | 福祉レクリエーション・ワーカー資格者も会員として迎え入れ、ともに歩む組織へ。<br>日本レク協会内に「福祉レクリエーション推進室」発足 |
| 1997年度～ | 日本レク協会の加盟団体（現在は協力団体）へ   |
| 1998年度  | 個人会員 497名・団体会員 29団体<br>(個人会費 1500円、団体会費 5000円)                      |
| 2006年度  | 個人会員 229名・団体会員 34団体<br>(個人会費 5000円、団体会費 10000円（100名以上は 20000円）)     |
| 2007年度  | 個人会員 173名・団体会員 22団体<br>(会費は同額)                                      |
| 2010年度  | 個人会員 182名・団体会員 21団体<br>(個人会費を値下げ、3000円に)                            |
| 2021年度  | 個人会員 107名・団体会員 9団体<br>(会費は同額)                                       |

\*下線は、会員の最大値

会員数も会計規模も全盛期に比べると小さくなったが、事業としては、年3回のニューズレター発行、年1回の福祉レクリエーション・フォーラムと総会の開催、全国レク大会研究フォーラムの中で福祉レクリエーションに関するワークショップや福祉レクリエーション全国集会の運営、地域ブロックごとのセミナーと連絡運営会議等、その他依頼に応じて福祉レク推進につながる事業を継続している。ボランティア型の組織でよく継続していると思う。しかし、現在はコロナ禍で、2年連続で対面方式の全国規模の福祉レク関連事業が中止となり、ブロックセミナーも対面で開催することができず、一部のブロックでオンライン方式の開催に踏み切った。人のつながりを大切にするネットワークの主旨からも対面方式の事業を望む声は根強いが、社会情勢に合わせた事業の検討も必要だと思われる。

## VI. 考察

### 1. 思いをつなぐ

ここまで、4つの視点から福祉レクリエーションについて足跡や現状を見てきた。

介護福祉士の養成カリキュラムに「レクリエーション」が位置づけられて以来、「レクリエーション」は福祉サービスの領域で理論的にも実践的にも大きな発展を遂げた。従来の福祉施設・事業所、特に高齢者関連の施設・事業所では利用者の生活の活性化を図るためにレクリエーションの重要性が認識されているし、特に通所介護サービスの場合は、レ

クリエイションなくしては活動そのものが成り立たなくなっている。通所介護サービス事業所の HP やパンフレットを見ても、活動内容・サービス内容にレクリエーションという表記がほぼ入っている。介護福祉士養成開始当初は介護という課題とレクリエーションとがしっかりそぐわないという認識さえあったものが、今や「レクリエーションのある介護」こそが介護の本質であるといっても、それほど抵抗はないのではないと思われる。

介護福祉士養成カリキュラムでは当初「レクリエーション指導法」とされていた名称自体も「レクリエーション活動援助法」に改められたことも、レクリエーション関係者が早くから主張していた“福祉レクリエーションは指導ではなく援助するもの”という考え方が現場に理解されてきた証ではないかと思われる。レクリエーションの主体はサービス利用者自身であり、集団的な活動がメインであると捉えられがちだったレクリエーションの認識が、個人の意思と個性に即して生活の中で多様なレクリエーションを支援するという個別支援重視の考え方も着実に広がっていると感じる<sup>xxiii</sup>。

しかし、国家資格の養成カリキュラムの必修科目名から消えて 10 年を過ぎ、現場ではレクリエーションについて学んでいない介護職員が増えていることも事実である。福祉現場はサービス利用者の重度化、ニーズの多様化、支援職の人材不足、コロナ禍によるコミュニケーション力低下等で、“生きがいの持てる豊かな生活”の質の向上が望みにくくなっている。「レクリエーション＝生活の快」や「レクリエーションは、本来の意味に付け加えて障害者などに対する治療的レクリエーションも取り組んでほしい。また、高齢者福祉の中では、彼らの社会的存在感の充足という点からもレクリエーションは不可欠」「すべての人の基本的人権としてのレクリエーション」と期待されていたことを福祉現場は忘れてしまうだろう。福祉現場にはレクリエーション活動支援力の豊かな人材が必要と思われる。

先人たちの築いてきた福祉レク運動を発展させるために、1) 福祉レクワーカーのプロフェッショナル化、2) レクリエーション学習の介護福祉士教育必修化、3) 福祉現場と福祉専門職教育との連携による余暇支援の質の向上、の 3 点を提案したい。

1) では民間資格ながらプロフェッショナル化したレクワーカーの全国の事例を集め SNS で発信することで社会的認知を高めていきたい。そうすることで普及啓発につながるはずだ。2) ではレク学習が福祉人材のコミュニケーション力向上に有効で、レク学習を積んだ介護福祉士が介護過程を通じ生活の質の向上・介護の質の向上につながっていることを PR する。そうすることで必修化の復活に近づくはずだ。3) では、福祉レクネットワーク等の草の根運動の更なる拡がりと併せて、様々な取り組みが考えられるはずだ。例えば、①介護福祉士養成校やレク課程認定校でレクリエーションを学ぶ学生たちの地域貢献活動の活性化や、②福祉現場の介護・支援職の皆さんと大学・専門学校等でレク教育を担う先生たちとネットワークを推進する地域レク協会関係者などで交流・情報交換・勉強会の実施、③現場で喜ばれている余暇活動支援の動画を SNS で発信する等を活性化する

積極的な連携、等だ。

①では、学校が減少したとはいえ、教育の魅力を再発見し発信したいニーズはあるし、学生たちも現場に出ていく意欲があるはず。地域と協力し知恵を絞って余暇支援の現場実践教育を地域に求めて取組みたい。②では、福祉レク教育専門職は教育力向上の視点で、地域レク関係者や福祉現場職員は支援力向上の視点で、何らかの「つながる」機会をつくり、そこから各自のニーズに応じて広げていければいいと考える。③では既にレク動画コンテンツは増えつつあるが、更に拡大することで若い福祉支援職に訴えていけるはずだ。

ちなみに、愛知県では2021年度介護福祉士養成校は12校、その内レク課程認定校は6校（50%）もある。まずは愛知県の介護福祉養成校でレク課程認定校の先生の交流など、出来そうなことから始めたい。そこに現場で働く卒業生でレクに関心のある方々や、県レク協会で福祉現場にフィールドを持つ指導者の皆さんと徐々に手をつないでいけたらと思う。

また、今年度全国に11校の福祉レク・ワーカー養成校がある。その内8校が介護福祉士養成校だ。教育力向上のための情報交換やマニュアル作りなど働きかけ活性化したい。諸外国のレクリエーション資格教育の在り方にも目を向け学んでいきたい。

## 2. コロナ収束後を見据えた課題

2020年2月頃から続くコロナ禍は、人と人の心をつなぎ連携して利用者の自立支援を目指す福祉専門職やその教育現場にとっては厄介だ。対面での接触を避ける「非日常」が日常となって、2年が経とうとしている。仕事や暮らしにオンラインを活用するスタイルが広がった一方、なんとなくコミュニケーションに物足りなさを感じている人も多いと思われる。筆者もこの2年間に、他大学で対面を控えオンラインのみで15コマ終えた授業がいくつかあった。やはり物足りなかった。（もちろん良かった点もあったが。）

「脳トレ」で知られる川島隆太氏（東北大加齢医学研究所所長）は次のように述べている。

「Zoom」などを使ったオンラインでのコミュニケーションと対面との違いを定量的に評価するためある実験を行なった。学部や性別が同じで、興味関心が似ている人たちを5人一組にして、学部の勉強や趣味など共通するテーマについて、顔を見ながらの対面とZoomなどオンラインとで、それぞれ会話してもらい、脳活動を比較した。何がわかったかということ、顔を見ながら会話しているときは、きちっと脳反応の周波数で同期現象が見られたが、オンラインでは一切見られなかった。つまり、5人とも脳活動が全く同期していないということは、何もしないで、黙ってボーしている時と同じ状態であるということ、つまりコロナ禍で多用しているオンラインのコミュニケーションツールは、脳にとってコミュニケーションになっていない、何もしていないのと同じだということが判った。同期しないということは、共感しない、相手と心がつながっていないということを意味する。これが通常のコミュニケーションで多用され続ければ、人と関わっているのに孤独になる、

という矛盾が起きてくることが推測される<sup>xxiv</sup>。

オンラインに頼ったコミュニケーションは孤独や孤立を生み出してしまうのかもしれない。これらのことも踏まえて、コミュニケーションの難しい利用者を相手にする、福祉専門職を目指す学生たちのコミュニケーション力に注視する必要がある。

今社会は「3密回避」「ソーシャルディスタンスの確保」「マスク着用と手指消毒の徹底」等で人との触れ合いの機会がほぼ無くなってしまった。マスク越しの不明瞭な声と目だけでは初対面の人の顔と名前が判別しづらく覚えられない。家族と触れ合えない施設入居者、2年間オンライン授業が多く友人の出来ない大学生、学校行事が激減した学校・園、外出自粛・ステイホーム・在宅ワークやらで、心を病んで人や健康が維持出来ない人が増加したと統計でも出ている。快い活動と良いコミュニケーションがレクリエーション活動の肝なのに、それが思うようにならないもどかしさばかりだ。でもそのうち以前の生活に戻る。触れ合える、笑い合える、喜び合える。その時のために人間らしさを失わないよう、今から備えておきたい。

「楽しい・嬉しい・快い」という感情こそがレクリエーションの原点であり、心の元気づくりこそがレクリエーションの主旨である<sup>xxv</sup>。レクリエーション支援にはコミュニケーション技術は重要だ。自分と利用者、そしてその周りの地域の方々の幸せ・元気・笑顔づくりという基本的支援を福祉レクリエーションは忘れてはいけない。

#### 【引用・参考文献】

- i 新村出、「広辞苑第七版」、20876、岩波書店、2018
- ii 藪田碩哉、「日本社会とレクリエーション運動」、8、学校法人実践女子学園、2009
- iii 藪田碩哉、「日本社会とレクリエーション運動」、6-7、学校法人実践女子学園、2009
- iv 財団法人日本レクリエーション協会編、「生活とレジャーへの問いかけ—レクリエーション白書’74」、第1章、日本レクリエーション協会、1974
- v 財団法人日本レクリエーション協会編、「レクリエーション運動の50年」、195、日本レクリエーション協会、1998
- vi 財団法人日本レクリエーション協会編、「レクリエーション運動の50年」、195、日本レクリエーション協会、1998
- vii 公益財団法人日本レクリエーション協会、  
<https://www.recreation.or.jp/license/what/worker/#0>
- viii 公益財団法人日本レクリエーション協会、  
<https://www.recreation.or.jp/license/what/worker/#0>
- ix NPO 法人アクティビティ・サービス協議会、<https://activity-service.org/>
- x 一般社団法人日本アクティブコミュニティ協会、<https://www.japan-ac.jp/>
- xi 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立20周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、4、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xii 財団法人日本レクリエーション協会編、「レクリエーション運動の50年」、195、日本レクリエーション協会、1998
- xiii 財団法人日本レクリエーション協会編、「レクリエーション運動の50年」、195、日本レクリエーション協会、1998

- xiv 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、47、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xv 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、48、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xvi 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、182、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xvii 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、182-183、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xviii 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、182-183、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xix 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、184、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xx 社団法人日本介護福祉士養成施設協会編、「創立 20 周年記念誌 介護福祉士養成の歩み」、48-49、社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2012
- xxi 「全国福祉レクリエーション・ネットワークニュース（仮称）第 1 号」、全国福祉レクリエーション・ネットワーク発行、1990
- xxii 「全国福祉レクリエーション・ネットワークニュース（仮称）第 2 号」、全国福祉レクリエーション・ネットワーク発行、1990
- xxiii 福祉士養成講座編集委員会編、「新版介護福祉士養成講座⑥ / 第 3 版レクリエーション活動援助法」、中央法規出版、2007
- xxiv 「オンラインで心はつながるか実は孤独に？「脳トレ」川島教授の分析」、朝日新聞デジタル、2022.1.17
- xxv 「楽しさをとおした心の元気づくり レクリエーション支援の理論と方法」、日本レクリエーション協会、2017